

B 野外活動指導法Ⅱ（通称，海キャン）

はじめに

野外活動指導法Ⅱは、初等教育学科1期生から実施している学科伝統の行事である。これまでにいろいろな変遷をたどって現在の形になっている。初期の頃は授業科目として設定してない状況で実施していた。ここでは、海をテーマとした絵画制作や班活動としての宮島の探索（紅葉まんじゅうの調査や巖島の歴史巡りなど）を行っていた。その後、昭和60年から「野外活動指導法」として、水泳実習を中心に、夜には野外活動関連行事を入れ、食事は自分たちで作って実施していた。この頃は、3泊4日の日中のすべての時間（午前と午後）に水泳訓練の時間が組み込まれており、体育系大学の水泳実習並みのハードなスケジュールで実施していた。ところが、体育系大学の实習では、食事は宿舎が提供してくれ、夜の行事はほとんどないため、実は体育系大学以上の過酷な条件で頑張っていたのである。その時の一番の心配事は実行委員の健康管理であったのが思い出される。

その後、本学にプールができ、水泳だけのために行う実習として「野外活動指導法」は認められなくなった。この実習の存在を問われたのである。そこで、野外活動全般を含めた内容を加味し、この実習を存続することとなった。水泳に関しても、プールでの水泳（いざとなったら足が着くという安心感のある場での泳ぎ）と海での水泳（足が着かないという不安を抱えての泳ぎ）の違いを鮮明にしつつ、遠泳という課題を中心としてその存続意義を確かめていった。

その中で以前行われていた班活動が復活し、海辺の生き物の観察、魚釣り、貝掘りなど様々な活動を実施した。その後、紆余曲折があつて、現在行われているような形に落ち着いてきたのである。現在の形の詳細については後述する。

結局、この臨海実習（海キャン）は、宮島の包ヶ浦で実施していることと遠泳60分の課題を掲げていること、学生の頑張りで大きな感動と仲間との絆が生まれていることが、30年近く変わらずに引き継がれていることである。

以下に述べることは、これらの歴史を踏まえた上で、現在実施されている実習の実際をまとめたものである。

1. 海キャンの概要

(1) 目的

本実習では、水泳に関わる様々な力をつけることと、野外活動の実践者としての諸能力を身につけることを目的として次の4つを掲げている。①水泳スキルを向上させること。②水泳の効果的な指導方法（初心者指導を含めて）を学ぶこと。③野外活動で行われる行事を体験し、これらの企画・運営・実践の力をつけること。④集団生活でのルールを守り、自分の役割を自主的に行い、協力の大切さを学ぶこと。

(2) 期間

8月の第3週から第4週の間で、土・日を含まない3泊4日の日程で行っている。これは、海水浴場の人出の数や海水温の関係でこの時期を選択している。3泊4日の日程も水泳訓練の時間、野外活動行事、自炊の回数などを考慮して設定された。

(3) 場所

宮島町包ヶ浦自然公園の海水浴場、団体用ケビン、団体用炊事棟などを利用して実施している。地理的に大学から遠くなく、瀬戸内海なので大きな波もなく、臨海実習用には適当な場所である。問題点としては、年によって、海水が汚れていたり、魚（カナゴキ）に刺されたりすることである。団体用ケビンや団体用炊事棟は集団生活を実践する上で不可欠である。一棟が14人や24人の宿泊施設であるため必然的に仲間のことも意識しながらの生活が要求される。また、団体用炊事棟は50名以上の食事を皆の協力の下に作っていく。日常では考

えられない食事の量を決められた時間の中でいかに作っていくかという能力も要求される。できれば、皆の質的な満足感と量的な満足感を達成しながらのことである。

(4) 行 事

下記の表は、ある年の実際の日程を表したものである。実際の流れに沿って各活動について述べる。

海キャン日程表の一例

	1 日 目	2 日 目	3 日 目	4 日 目	
a.m. 5 : 30		炊飯器スイッチ ON			
6 : 00		起床・身支度			
6 : 30		ラジオ体操・朝の会			
7 : 00		朝食準備 (+ 昼食準備)			
7 : 30		朝 食			
8 : 00		片付け&準備			
9 : 00		開 校 式	水泳&救急法	ビーチバレー スイカ割り	遠 泳
10 : 30					
p.m. 0 : 00	昼 食				
1 : 00	水 泳 訓 練			片 付 け	
				閉 校 式	
4 : 30	入浴&夕食準備				
6 : 30	夕食&片付け				
8 : 00	肝 試 し	花火大会	キャンプ ファイアー		
					連 絡 会
9 : 30	連 絡 会				
10 : 00	点呼・就寝				

①開校式

現地に集合し、初めて全員（指導員や教員を含めて）が顔を合わせ、これからの3泊4日を頑張り抜く決意をする場である。学科長，実行委員長を始め、指導員となる先輩や皆のいのちを見守ってくれる教員たちとつながりを持つ場でもある。

②水泳訓練

目的にも挙げられたように、まずは、自分の水泳スキルの向上に努めることである。この実習における目標として掲げられていることは、次の通りである。

「遠泳」……………30～60分	「飛び込み」……逆飛び込みと順下
「立ち泳ぎ」……前後左右5 m	「潜水」……………15～25 m
「ドル平泳法」…25 m 及び指導法	「水遊び」……………5種類以上
「着衣泳」……………15 m 以上泳ぐ	「横泳ぎ」……………25 m 以上
「クロール」……25～50 m	「平泳ぎ」……………25～50 m
「背泳」……………25 m 以上	「バタフライ」…25 m 以上

これらの目標は、学生のスキルレベルに合わせて改めて班毎に目標を設定して指導している。ただし、「遠泳」、「飛び込み」、「立ち泳ぎ」、「ドル平泳法」、「水遊び」、「着衣泳」、「クロール」、「平泳ぎ」については、すべての学生の目標として設定している。

基本的には4日間の水泳訓練の時間でそれぞれのスキルを向上させている。上級者は、各種泳法の泳ぎ込みを通して、「楽に長く泳ぐ」方法を会得し、効率的な力のいれ具合を学習する。加えて、初心者指導や各種泳法の指導方法も学んでいく。逆に、初心者や初級者は、25 m 以上泳げるようになるために呼吸のタイミングや手足の動きを修正し、自らの泳ぎをより効率的できれいな（合理的な）フォームにすることを念頭に泳いでいく。さらに、水と戯れることの楽しさを学ぶための「水遊び」や恐怖心と戦いながら次第にその楽しさを感じてくる「飛び込み」などを経験して海に親しみを持つのである。

この中で、最大の目標としているのは「遠泳」60分である。この実習では、遠泳の距離を問うものではなく、時間で設定している。つまり、足で立てない状態で60分間浮いていることを求めている。20数年以上続くこの課題をすべての学生がクリアしていることは特筆すべきことである。泳力に自信のある学生は隊列を組んで整然と泳いで行くのであるが、そうでない学生は四苦八苦である。中には、泳いでいる時間よりも浮いている時間の方が長いような学生もいた。それでも、教員、補助学生、さらには泳げる班員のサポートによりこれまでの成果を上げている。一人では投げ出しそうになる気持ちを、先輩や友人の励ましの言葉でもう一度気持ちを奮い立たせ完泳していくのである。その後の

光景は、水際から先に上がった学生や教員の花道ができ、そのトンネルをくぐりながら大きな達成感や満足感に浸っていくのである。同じ班員や先輩などしっかりと抱き合いながら見せる涙や笑顔は最高の姿を現している。まさに青春ドラマそのものである。常日頃、苦しいことや辛いことから逃げ出すことの多い今の若者が、不安や怖さと戦いながら頑張っていくことに大きな意義を感じる。また、ここでの感動は、日頃の生活では味わうことの出来ない程大きなものがあり、一生の記念になると思う学生が多いと考えられる。(学生の感想参照)

③肝試し

教員がお化け役になり、学生が4～6人のグループで暗闇の中を歩くものである。団体用ケビンなどがある場所から山(弥山)に登る道があり、そこを利用して行われる。もちろん電灯など一切なく、周りを木々に囲まれた山道である。各グループは懐中電灯一つで歩くため学生にとってはかなりの怖さがあるようである。教員側も傘やビート板など小道具を駆使して怖さを演出している。また、学生側も出発前に怖い話をして雰囲気盛り上げて出発している。学生にとってはかなり好評な行事ではあるが問題点もいくつかある。例えば、暗闇の山道のため安全性を十分に確保すること、1グループ毎になるため時間がかなりかかること、お化け役の教員が長時間暗闇に隠れて対応すること、などが挙げられる。

④ラジオ体操・朝の会

2日目から4日目の朝に行われる行事で、6時30分までに集合し、まずはラジオの放送に合わせ、体操を行う。その後、朝の会で、学生代表、指導員代表、及び教員代表から、その日一日に向けての思いなどの話をする。ラジオ体操は小学生以来という学生も多いが、一日の始まりとして全員が集まり、一緒に体操をし、そしてその日一日の目標などを話すことは、集団としての意識も高まり、個人の活動意欲も高まるものと思われる。

⑤バーベキュー

2日目の夕食の恒例行事になっている。施設内にある野外炊飯場の広場で、生活班毎にバーベキューを囲む。火をつけ炭を燃やす段階から班のメンバー(教員も活躍する)で協力し、作業を進める。また、食事の段階になると、肉

や野菜を焼きながら和気あいあいと楽しむ姿が見られる。この辺りで学生達は急速に親密感を増していく。

⑥花火大会

空全体が暗闇に包まれる8時頃に浜辺に集合し、まずは打ち上げ花火からスタートする。近頃街中では出来ない打ち上げ花火を思う存分楽しむことができる。その後、手持ちの花火を楽しみ、最後は練香花火である。それぞれの思いを託し、静かにしっとりと練香花火の明かりに集う姿も見られる。対岸の広島市内の夜景を見ながら行われる花火は趣のある行事である。安全性と後始末は確実に確認する必要はあるが、貴重で楽しい経験である。

⑦ビーチバレーボール大会

3日目に行われるレクリエーション行事の一つである。生活班が一つのチームとなり、砂場で行われる4人制のゲームである。ソフトバレーボールを使用することにより、初心者でも気軽に参加できる。先輩の指導員や教員も全員参加し、毎年かなりの盛り上がりを見せている。予想外のファインプレーや勝ちにこだわる姿勢など、学生、先輩、教員の意外な一面を見ることが出来る。

⑧スイカ割り

夏特有の行事であるが、身近なところではあまり見られなくなった。目隠しされてスタートした直後に棒の回りを10周回り、平衡感覚を乱した状態で、10m先のスイカに向かって歩いていきスイカにめがけて思いっきり棒を振り下ろすのである。サポート役(?)の観衆はわざと波打ち際に誘導したり、逆方向に導いたり、あるいはまともにサポートしても本人の意志とは違ってよろよろと違った方向に行くなど愉快な現象を楽しむのである。この遊びで、また一段と親密感を増すことが出来る。

⑨キャンプファイアー

野外活動での最大のイベントである。ねらいとしては、①自然の偉大さを知り、火に感謝の気持ちを持つこと、②厳粛な儀式や楽しいレクリエーションを体験し、キャンプの思い出を深めること、である。様々な進め方はあるが、ここでは一番オーソドックスな方法を使うように指導している。儀式的な色彩を帯びたオープニングセレモニーから始まり、皆が賑やかに楽しむレクリエーションアワー(ボンファイアー)に続き、最後に厳かな雰囲気で行われるエンディング

グセレモニーとなる。近年行われているキャンプファイアーの一例を挙げてみる。オープニングセレモニーでは、参加者は集合した場所からファイアー場へ静かに入場する。ファイアーを囲んで円になり、全員入場後、エールマスター（進行係）の歌声により「遠き山に日は落ちて」を斉唱する（一番斉唱、二番ハミング）。二番になった頃、営火（トーチを持つ者は実行委員長や誕生日の人などである）が入場する。火にまつわる誓いの言葉を捧げ、点火となる。点火と同時に「燃えろよ燃えろ」を斉唱する。場合によっては営火長（実行委員長）の言葉などがある。次にレクリエーションアワーに入り、エールマスターの指示により、レクリエーション担当者がいろいろなゲーム、ソング、ダンス、シンキングゲーム、並びにスタンツなどを披露し、皆で大いに盛り上がる。具体的には、ゲームでは「キャンプだホイ」、「猛獣狩り」、「アブラハムの子」、「人間知恵の輪」など、歌いながら動き回るものが多く行われる。スタンツでは、実習中の出来事や仲間の話題などを取り上げたものが披露される。最後に、エンディングセレモニーとなる。賑やかな状態から静穏な雰囲気に戻り、エールマスターや営火長の言葉（実習全体の成果や今後の発展に関すること）が語られる。その後、全員と握手が交わせるような形でファイアー場を退場する。このようなプログラムを実施していく中で、学生、先輩、教員の親密な関係が熟成されていくのである。

⑩閉校式

4日間を振り返りながら、学生代表の感謝の言葉、指導員の先輩からの温かいお褒めの言葉、さらには先生からのねぎらいの言葉を中心に行われる。この実習が持つ大きな意味を改めてかみしめるときである。

2. 海キャンでの活動組織

学生主体の行事であるため、学生の中から立候補を募り、実行委員会を組織する。実行委員会が立ち上がった後は、それぞれの担当を中心に活動を始める。以下が委員会の仕事である。

- 1) 実行委員長…全体の取りまとめ、総責任者
- 2) 副委員長（2名）…委員長のサポート役
- 3) 書記（2～4名）…パンフレットの作成や記録（時には写真係も）

- 4) 会計（2～3名）…費用の徴収と支出の管理，会計報告の作成
- 5) 食事（4～6名）…総勢50～80人の3泊4日分の食事の世話をする係，献立の作成，事前の食料調達，調理の指導，食事の準備と後片付けの指導，炊事棟の管理
- 6) 装備（2～4名）…水泳訓練に必要な用具の管理，行事に必要な用具の管理，事前事後の用具の点検
- 7) レクリエーション（4～8名）…水泳訓練とファイアー以外の行事の企画・運営 例えば，「肝試し」，「ビーチバレー大会」，「花火大会」など
- 8) ファイアー（4～8名）…最終日の前夜に行うキャンプファイアーの企画・運営

その他の活動は，水泳訓練中の実習班（レベル別に班編成されている）と生活班（水泳訓練以外での活動を共にする）に分かれて行う。

3. 海キャン実施までの流れ

野外活動指導法Ⅰ（山キャン）とⅡ（海キャン）は，2年生の選択必修科目である。そこで，4月のチューターガイダンスの時に概要を説明し，選択のための判断の参考にしてもらおう。その後，5月の連休明けに第一回目のガイダンスを開く。ここでは，①海キャンの概略の説明，②実行委員会の組織化，を中心に話し合う。前述したように，基本的には希望する委員に立候補を促し，メンバーを決めていく。また，委員会のメンバーにならなかった学生も，生活班の班長や班内での役員になるようにする。生活班の分け方は仲間同士や無作為に作ったグループなどその年の委員会の考え方によって様々である。ガイダンス終了後，委員長，副委員長，及び担当教員と相談しその後のスケジュールを決めていく。以下に大まかなスケジュールを記す。

5月：各担当で仕事の内容や役割分担などの話し合いを進める。

6月：担当毎にパンフレットの原稿作り。実習費（現在は13,000円）の徴収。

班分けのための泳力テストの実施（クロールと平泳ぎ25mのタイム）。

7月：宮島町包ヶ浦自然公園への下見。パンフレットの作成。事前学習会の開催（2～4回）

8月：実習日前日に，最終チェックをするための集合。食料の買い出し。装

備の詰め込み。

4. 海キャンでの学び

本実習においては自らの学習成果を確認するために水泳の学習を中心とした「実習日誌」を記録している。学習内容、課題となったポイント、達成されたポイント、今後の課題などである。また、最後には、全体を通しての実習のまとめの欄があり、水泳に関すること以外も含めて、この実習での学びを記述することになっている。これまでの記録から大きく分けて4つの観点からまとめることができる。

- A. 苦しいことや辛いことを成し遂げた後の達成感
- B. 皆で同じ目標を共有した喜び
- C. 先輩や後輩、加えて教員とのコミュニケーションの深まり
- D. 集団生活での協調性や役割認識

ここでは4つの観点から選んだ学生のレポートの抜粋を挙げる。

- ・とても辛かったのですが、今から考えると、大自然の中で自分をあそこまで追い込んだことはなかったので、生まれて初めて自分自身の生命力の強さを感じることができました。人間は私が思っていたよりも、すごく強い生き物だということに気がつきました。
- ・岸に帰ったら先生、先輩、友達みんながアーチを作って待ってくれたことと、みんなが泳ぎ切ったことに感動し、わからないまま涙が出てきて、自然に本当に心から泣きました。あの瞬間に「海キャンにきて良かった！」と思いました。苦しいことや悲しいことがたくさんあったけど、それをはるかに超える感動を味わうことができました。本当に楽しかったことしか思い出せません。
- ・どんな困難に出会っても一緒に乗り越える仲間がいれば乗り越えられないことはないということを学びました。遠泳は本当に辛かったです。しかし、この辛さは自分一人で味わっているのではなく、同じ班の人たち皆で味わっているものだ、皆歌を歌いながら頑張っているんだ、自分も頑張らなければ、と思うことができました。泳ぎ終わった後に皆で涙を流して喜び合ったことは

絶対忘れません。困難を乗り越えた後の喜びを知ることで、またいつか辛くなったとしても、頑張って乗り越えれば自分にとってプラスになることが待っているということがよくわかりました。

- ・4日前、全く平泳ぎができない状態であった私が、今は平泳ぎで60分を泳ぎゴールを目前にしている。先輩方の丁寧な指導といつも笑顔で励ましてくれた温かさのおかげだと思った。先輩方に心から感謝した。ゴールでは皆が待っていてくれた。「頑張れ！ラスト！」皆からの声援が聞こえる。あと少し、もう少しだ。顔を上げるたびに砂浜が近づいてくる。だんだん海の底が見えるようになってくる。あと少し…。ゴール！！ついに60分泳ぎ切った。皆が作ってくれた花道をくぐる。「頑張ったね！」、「おつかれさま！」皆の温かい歓声に囲まれて、私はゴールした瞬間から涙が止まらなかった。うれしさ、今までの苦しさ、感動、達成感、感謝…いろいろな気持ちが入り混じっていた。でも、このとき流した私の涙は確かにきれいなものだった。
- ・初めは行くのが嫌で、初日はこれが4日も続くかと思うとすごく憂鬱だったけど、最終日にはもう終わりかと思いました。それだけ充実した4日間だったのだと思います。この4日間を乗り越えられたのは仲間の支えのおかげだと思います。寒いと言いながら一緒に頑張ったバディや班の仲間、一生懸命指導してくださった先輩や先生方のおかげで60分という長い時間を泳ぎ切ることができたと思います。そんな仲間に出会えて本当によかったと思います。この海キャンで少し成長できたと思います。何でもやる気になれば乗り越えられるような気がしました。
- ・とても嬉しくて感動したことがあった。それは食事係以外の人が朝早く起きて私たちを手伝ってくれたことである。朝の早起きは食事係としての使命であり、なったからには当然の責任として毎朝頑張る気持ちでいた。しかし、そんな私たちを気遣ってくれ、絶対に眠たくてきついはずなのに、笑顔で手伝いに来てくれたのである。
- ・海キャンでの経験は必ずこれから先の自分の財産になると思います。海キャンで学んだ感謝の気持ちや友達の大切さ、協力することの大切さ、忙しい日常生活の中では忘れがちなことですが、これらを忘れないように生活していきたいです。

おわりに

本実習は初等教育学科創設時から続いている伝統の行事であり、その精神は脈々と受け継がれている。一つ目は、自然の中で生命と対峙しながら困難な課題に挑んでいくことである。近年の若者を見ると、辛いことや面倒なことは極力避ける傾向にある。ところが、「遠泳60分」という課題はこれまで経験のないもので、泳ぎが得意な人であっても少なからず不安や恐怖を感じるものである。段階的な指導（小遠泳から中遠泳、そして遠泳）に基づいてはいるものの当日の緊張感は相当なものがある。さらに、時間経過と共に変わっていく心と身体の変化を自らが真正面に受け止めなければならない状況にある。それ故無事達成したときの喜びは計り知れない。日常では味わえない体験をし、その結果大きな感動を呼ぶものと思われる。

二つ目は、経験を共有できることである。自分一人ではなく、パディと、班員と、先輩と、教員となど常に誰かと関わりながら経験していくことである。この皆と共に経験することが、皆との絆を深め、経験したものしか味わえない一体感を感じることが出来るのである。このことが皆の理解を深め、今後の人間関係に大きなプラスになる。共通する目標を持って、寝食を共にしながら4日間共同で過ごすことは様々な形で学生たちに何らかの影響を及ぼすものだと考えられる。

今後とも、初教の、いや、文教の特色ある教育活動の一つとして着実に進めていきたい行事である。

(川西正行)